

令和6年度 第1回総合教育会議

日 時 令和6年9月9日

午前10時00分開会

場 所 A301－302会議室

1 開 会

○林部長

おはようございます。

ただいまから令和6年度第1回総合教育会議を開催いたします。大変お忙しいところお集まりいただき、誠にありがとうございます。

本会議は、市長と教育委員会が教育行政について、協議・調整するものとして、法律に定められた会議でございます。地方公共団体に設置されるため、企画部で事務局をさせていただいております。

本日、司会をさせていただきます企画部の林と申します。よろしくお願いいたします。

2 あいさつ

○林部長

それでは、最初に佐藤市長からごあいさつ申し上げます。

○佐藤市長

おはようございます。

教育委員の皆様には、日頃から当地域の子どもたちのため、あるいは社会教育の分野も含めてご尽力をいただいております。本当にありがとうございます。

総合教育会議の設置の意義は、基本的に教育のことは教育委員会にお任せしている部分が多いのですが、市長部局としっかり連携を取って、方向性が違っていった場合に、子どもたちや社会教育に携わる方々に悪い影響を与えてはいけないということで、すり合わせや意見交換の場として、法律上設けられているものと理解しています。

もともと大津市のいじめ問題からだったと思いますけれども、そういう個別の事案というよりは、今申し上げたような大きな意味での方向性の確認が大事になってくると思っています。

今日は1回目のテーマとして『ムトスの学び』が目指す学びの姿とは」という少し抽象的なテーマをお願いしました。その趣旨として、私なりの思いを申し上げますと、おかげさまで飯田市の学びは、公民館や地域の学びが非常に評価をされていて、全国から大学の先生方、学生さんを中心に、今でも学びに大勢来られています。飯田市あるいは飯田下伊那の公民館活動は、全国的

にも非常に評価されている面があります。

近年では、阿部知事が始めた就学前のこどもたちをどんなふうに育てるかという「信州版やまほいく」が注目されています。実際に飯田市も全公立園で「信州版やまほいく」を取り入れ、それと協調して民間園の皆さんも「信州版やまほいく」の認定を受け、「飯田版のやまほいく」という形で、親御さんたちが認識を持ち始めています。そういう状況にある中で、飯田の小中学校の学びはどういうものなのか、うまく良いところを伝えられていないのではないかという意識を持っています。実は、熊谷教育長には、「飯田の学びを一言で言うとどんな学びなのか言えるようになる」と良いですね」という話をずっと申し上げていましたが、今回「ムトスの学び」という言葉を、教育委員会から出していただきました。飯田市の小中学校で学んだこどもには「ムトスの学び」が、学びとして力を付ける環境にあると言い表せるとすると、それはどのようなものなのか。親御さんたちや地域の皆さんに、『ムトスの学び』とはこういうものだ」とどのように言えば良いのか。その認識をぜひ共有したいと思い、今日のテーマにさせていただきました。

今、市全体として、いいだ未来デザイン 2028 の 4 年間の後期計画を作成しています。教育委員会では、教育振興基本計画の後期の取組を作成するタイミングになっています。いいだ未来デザイン 2028 の後期計画の中では、「地域に誇りと愛着を持てるまちづくり」という意味で、学びのことについても触れる形で計画を策定しようとしています。そこで「ムトスの学び」という言葉を入れていくとすれば、それはどういうものなのか共通認識として持たないといけません。飯田で学ぶ小中学生、高校生も含めての学びを「ムトスの学び」と言うならば、その中身とはどのようなものなのか、ぜひ皆さんと意見交換して、認識を共有するために、意見交換ができればと思っています。よろしくお願いいたします。

○林部長

続きまして、教育長、お願いいたします。

○熊谷教育長

改めまして、おはようございます。よろしくお願いいたします。

今回の総合教育会議は、「ムトスの学び」をテーマにご提案いただきました。なぜ私が言い始めたのか少しお話させていただければと思います。着任してすぐの校長会で、飯田市がこれまで大事にしてきた「飯田市学力向上『結い』プラン」について、授業の最初の段階で「ねらいを明確にしましょう。」授業の半ばでは「メリハリのある授業をしましょう。」授業の最後では、「見届けをしっかりとしましょう。」という県の授業の 3 観点とも連動した授業のあり方を例としたときに、校長会から「このままで良いのか」と問いかけをいただき、「本当にそのとおりだ」と思っていたことがきっかけだったと思います。

前任の職として「信濃教育会」で仕事をしていたのですが、信濃教育会の「全県研究大会」があり、各郡市に授業公開をお願いし、先生方が集まって研修する機会をつくっていたのですが、持ち回りでやっていくと不満が溜まってくるんですね。やりたい人が公開授業をするというやり方に変えたところ、今年の実県研究大会ではかなりの学校が授業公開をするように変わってきており、飯田市でも旭ヶ丘中学校や千代小学校が手を挙げました。

下伊那教育会も委員会の発表を2月上旬頃に行うのですが、今までは9教科等の委員会で発表する委員会を指定していたのですが、発表したい委員会が手を挙げるように変わってきています。

一方、授業を見てみますと、教育委員の皆さんも見ていただいておりますが、相変わらず先生が前に立って主導して一斉授業をしています。この授業のやり方は、知識を理解するために大変有効な方法で、日本の教育では大きな成果を上げてきたと思うのですが、一方で、不登校が非常に増えています。私が教員になった頃から「一人一人」とか、「自ら学ぶ」ことをずっと研究テーマに据えているのですが、実際には、教員がルールを敷いて、その上をこどもたちが安全に前へ進めるように準備していく。先生が決めたゴールへ行く授業をずっと大事にしてきました。それはもしかしたら、学制が公布された明治5年から150年間ずっと続いてきた宝なのかもしれませんが、そのシステムが今のこどもたちにとっては非常に苦しいものになってきているのが不登校の原因の1つとされています。そういう中で、教師を主語とした学びではなく、こどもたちを主語にした学びができないかと考えたことが一番のきっかけでありました。それを令和4年度を通して、令和5年度に先生方をお願いしました。もともと飯田市は昭和57年の3月から「ムトスの心」を大事にしてきており、それが非常に同じ方向性だと感じていました。しかし、言葉として、理想として大事にしても、実際はなかなかそうならないのではないか。そんな課題意識を持って提言したところであります。

総合的な学習の時間が始まった平成11年頃、中学校でこどもたちの総合的な学習をどうやったらいいか困り、こどもたちと一緒に考えたことがありました。そのときに思ったことは、普段の9教科の授業ではなかなか活躍できない子たちが、総合的な学習の時間では、ものすごく前向きに、明るい顔をして、勉強する姿がありました。本当の学びの本質的な部分がそこにあったのではないかとずっと思っており、そうしたことの基になっているのが「ムトスの学び」ではないか。そういうものを目指していきたいと考えた次第であります。ぜひ共有しながら、同じ方向で行けたら良いと思っております。

○林部長

ありがとうございました。

3 意見交換 『ムトスの学び』が目指す学びの姿とは

－飯田市教育振興基本計画後期の取組及びいいだ未来デザイン 2028 後期計画策定に際しての飯田のこれからの学びの姿の共有－

○林部長

それでは3の意見交換にまいりたいと思います。本日、終了予定は11時半でございます。まず、教育委員会からご説明いただき、その後、皆様で意見交換をお願いいたします。

本日のテーマは、『ムトスの学び』が目指す学びの姿とは」でございます。教育委員会事務局から説明をお願いいたします。

○後藤課長

それでは、お手元にあります資料を御覧ください。

まず、今年度飯田市においては、いいだ未来デザイン 2028 の後期計画を策定し、来年度からスタートします。第2次教育振興基本計画の後期の取組も今年度作成し、来年度からスタートするという状況にあります。

国の教育振興基本計画は、令和5年度から既にスタートをしており、「持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」の2本をコンセプトとして打ち出し、5つの基本的な方針を掲げて、現在取組がなされています。

併せまして、長野県の教育振興基本計画も、同じく令和5年度から令和9年度までを計画期間とし、目指す姿を「個人と社会ウェルビーイングの実現～一人ひとりの『好き』や『楽しい』、『なぜ』をとことん追求できる『探究県』長野の学び」として政策が進められているところです。

どちらも共通するキーワードとして「ウェルビーイング」という言葉が使われていますが、どちらも同じ意味で使われており、「身体的・精神的・社会的に良い状態にあること」という解釈で、それぞれその向上に向けて取組を進めていくことが、それぞれの計画の中で打ち出されています。

飯田市では、いいだ未来デザイン 2028 の後期計画の素案の段階のものを、これから市民や議会の皆様からご意見をいただいて固めていきます。教育に関する基本目標として2つ掲げておりまして、「市民が将来にわたり地域に誇りと愛着を持てるまちをつくる」と「飯田（ここ）で育ってよかった・育ててよかったと実感できるまちをつくる」を基本目標として、それぞれ戦略を考えていきます。

続いて、2ページをお開きください。

先ほど教育長から説明がありましたが、「飯田市学力向上『結い』プラン」は、下の点線のラインボックスで囲んだところに説明があるとおりでございます。

今日のテーマとなっている「ムトスの学び」については、学校教育における「ムトスの学び」の定義として、「こどもの願いや疑問点を起点として、それに応じるように教育環境を整え、子ども自ら授業をつくっていく学習のこと」を位置付け、図化したものになります。「私の問いをもつ」「私の願いをもつ」というところから、「やってみる」「体験する」「出会う」、そして「考えを持つ・伝える」「友の考えを知る」これをループ上に繰り返していくことが「ムトスの学び」のポイントと捉えていただければと思います。

続いて3ページになります。

本日は学校教育における「ムトスの学び」が一番のテーマでございますが、先ほどの市長のあいさつにもありましたとおり、飯田市では公民館活動を中心として、この「ムトスの学び」が広く展開されています。幼児期から高齢期までそれぞれの年齢で市民の皆様方が、展開していただいている「ムトスの学び」をまとめたものになります。

特に学校教育の分野では、コミュニティスクールや小中連携・一貫教育、学園構想や特設科目をつくる取組やキャリア教育で「ムトスの学び」が生かされております。

また、公民館活動もちろんですが、高校生や大学生をターゲットとした次世代育成事業を行っていることは、非常に飯田の社会教育の中でも特徴的な取組ではないかと思えます。

また、地域では様々な文化活動が長く続いております。これまでの学級・講座の参画のほかに、特に飯田の場合は、地域の伝統芸能が集落単位で守られているという現状があります。これも立派な「ムトスの学び」ではないかと私どもとしては認識しております。

また、「自治の学び直し」も、今後の自治活動をより発展させていくためには、大事な取組ではないかと意識しております。

4ページ以降は、学校教育専門幹からご説明をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

○北澤学校教育専門幹

それではお願いいたします。資料を見ていただければと思います。

まず、4枚写真がございます。上の2つ、龍江小学校・竜東中学校の写真は昨年度の2月に行われたキャリアフォーラムでの発表の様子です。

左上、龍江小学校の「龍江の竹とわたしたち」は、総合学習の時間において、昨年度の6年生の実践になります。放置竹林が龍江で地域の課題になっていることに着目した児童が、その竹を有効利用することによって、何かできないだろうかという課題を設け、4年生の頃から取り組んできたものであります。写真は6年生のときに、放置竹林を切った竹製品を天龍峡マルシェで販売したときの様子です。地域の方と関わりながら、自分たちができる課題解決を実践し、地域へ

の思いを高める取組であります。

右上の写真は、竜東中学校です。これも同じく、地区における課題を何か解決できないかと取り組んだ実践であります。それまで竜東中学校では、行事をこなすような総合学習の時間のあり方だったものを、そうではなく、自分たちで課題を設けて取り組んでいける流れに変えたいということで取り組みました。最初に自分たちの地区を歩いて回ったところ、地区のキャンプ場を再生しようとしている地域おこし協力隊の方との出会いをきっかけに、学年で取り組んだものです。

左下は追手町小学校の「全校造形活動の日」の写真です。小学校の学習指導要領の中に「造形遊び」という言葉が出てまいります。材料に働きかけて自分の感覚や行為をとおして、形や色などを捉え、そこから生まれる自分なりのイメージを基に、思いのままに発想や構想を繰り返し、手や体全体の感覚などを働かせながら技能などを発揮していくことを目的に、1日全校造形の日として活動をしています。写真にありますのは、木工関係を自分なりに創作しているものになります。児童の構想・発想に基づいての展開になります。

右下になります。今度は今までの3枚の写真とは違って、通常の授業の中で何か課題や意欲を持ちながらできないかということで、小学校2年生の算数にある「水のかさ」の座光寺小学校の学習の様子です。「1リットルは何デシリットルになるか」実際に水で確かめるため、たらいの水を汲み、ビーカーを使って確認しています。教室の黒板の授業ではなくて、実際の体験を加え、課題化しながら学習をしている様子です。

5、6ページは、全国学力・学習状況調査等の質問項目の中から、こどもたちが課題を設けることに関係した質問を取り上げました。

5ページの1つ目「前年度までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という問いに対する令和3年度から令和5年度までの調査結果です。その下は、総合的な学習の時間での取組の様子です。

6ページは、もう少し先のことを考えて「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある」という問いを小中学生に、「地域（社会）をよりよくするために、地域課題の解決に関わりたいと思いますか」という問いを高校生に意識調査をした結果です。

最後は、「人の役に立つ人間になりたいと思うかどうか」という問いをまとめたものです。以上です。どうぞよろしくお願いいたします。

○林部長

ご説明をいただきましたので、これから意見交換に入りたいと思います。「ムトスの学び」は生涯を通じてというお話もございましたが、今回は、こども、学童期、学校教育に焦点を当ててご意見いただければと思います。もちろん地域との関係性や幼児期と青年期とのつながりという視

点もございます。家庭教育との関係も深いので、その辺りも含めてご発言をいただければと思います。

また、今回はテーマを分けて意見交換はいたしませんので、積極的なご発言をいただければと思います。

教育委員会のご説明に、ご質問等あれば最初にお伺いしたいと思います。よろしいですか。

○参加者

— 質問する委員なし —

○林部長

それでは、意見交換に入ります。それぞれ委員の皆様方が考える学びの特徴や「ムトスの学び」の大切な視点は何かという部分からでも結構です。ご発言ある方はお願いいたします。

北澤教育長職務代理者お願いいたします。

○北澤教育長職務代理者

学校に関わることを最初に私から発言させてもらいたいと思います。

「ムトスの学び」のキーワードは、教育長の話にもありましたが、「主体性と実感のある体験活動」だと考えています。

学び手である子どもの姿から見た「ムトスの学び」は、体験やチャレンジの中から問いや願いを持って、多様な人と協働しながら生きる力を学んでいく。指導・支援する側から捉えると、少し理屈っぽくなるのですが、この後の話の土台になっていくと思うので申し上げますと、今よく言われる個別最適な学びと、多様な他者と協働する学びを一体化することかなと。もう少し平べったく言うと、一人一人に合わせた支援を個別化することや、学び方の個性を生かす。その際に、異なる考えの組合せができるように、学級や学年はもとより、異学年、地域の人、専門家など多様な他者との協働を通すことで、単なる知識ではなく、先ほど教育長も言っていましたけれども、問題解決力、人間関係を築く力、相手意識のある言語活動、知恵として生きる力を育んでいくことになると思います。

そうやって捉えると、「ムトスの学び」は、北澤専門幹の座光寺小学校の例にもあるとおり、特別なプロジェクトのような取組だけにあるのではなく、学校の日々の一時間一時間の授業の中でも具現できることかと思っています。

課題にもつながるのですが、まず学校の先生方に意識してほしいことは、一時間の授業の展開だけではなく、例えば今よく单元内自由進度学習ということを言われますけれど、一つの单元全体を通して、主体性や個性が生かせるような学習展開や、それから従来から大事にしている習得型の学習が全ていけないということではないと私は思っています。そこを疎かにすると土台が危

くなると思います。だから、従来の習得型の学習と体験や発見を基調としたプロジェクト型の学習を融合させることがすごく大事なのではないかと。習得型の授業で培った基礎・基本の力をプロジェクト型の授業で根拠を持って考えることや発信することで実の場につなげていくことが必要だと思います。

そうした観点から、市内の特徴的な学びを見ていくと、例えば、小中学校で総合的な学習の時間と理科や社会科を重ねたふるさと学習やキャリア教育はかなり深く着実に進められていますし、また、学校を出て行う活動が制限されたコロナ禍を逆手にとって、企業、専門家、地域の方を招いて学ぶキャリアフェスのような取組も、各学校で着実に根付いていると思います。そういう学びの発展として、こどもたちの主体性や発想をととても大事にし、地域をテーマにした学習、学年の枠を取り払い全校で行っている学校、実際に地域に出向く地域貢献活動など9つの中学校区がそれぞれ何かを工夫して、特色を持って進めているのが現状です。また、ボランティアステーションみたいなものを設けて、一人一人のこどもの主体性で、地域に出て、地域の活動をしながらかから学ぶことを、公民館などが間に入って進めている地域も増えてきていると思っています。

こうしたこどもたちの動きも「ムトスの学び」の一つの形として、飯田の特徴的な学びと言えるのではないかと考えていますし、市長からもありましたけれど、「飯田の学びは」と言われたときの一つの形として、今後ますます進めていきたいと考えています。最近、高校生と関わることも多く、小中学生の学びから発展した高校生の学びも情報を持っているのですが、それはまた後半でお話しながら、「ムトスの学び」を深めたいと思います。以上です。

○林部長

ありがとうございます。発言のある方お願いいたします。

野澤委員お願いいたします。

○野澤委員

自分なりに考えたことをお話させてもらえればと思っています。「ムトスの学び」とは、どんな言葉なのかなと思って聞いていましたが、「内発的な自主性を尊重する」ことなのかなと考えました。そのときに、人生を生きる目的や目標を見いだすことは、非常に大事だと思います。勉学は手段であって目的にはならないことが理解されなければいけなくて、そういう環境づくりをどうしたらできるのか考えてみました。

低学年の頃は、まだ自我が確立していないので、環境として何を言っても大丈夫。みんなが同じ方向を向いているのだけれど、自分が反対のときはパッと反対できて、それをみんながシェアできる環境や、知らないことがあればスッと尋ねることができる。問題だと思えば、そのミスを

スツと言えるような環境。困ったときはお互い様みたいな、助け合いの精神が建設的に解決策にもっていける環境。大事だと思っているのは、チャレンジ精神です。とりあえずやってみよう。チャレンジが損じゃなくて得に思えるような、前例がなくても取り入れられるような、多少非現実的でもやってみようと思えるようなことが低学年のときにあれば、いろいろなことを表現するにあたって、安心感があると思います。

何か自分の目標や目的を気付きで捉えたときに、一番大事なのはその安心感の部分だと思います。人と意見を交わす中でお互いの意見が対立したときでも、きちっとそのフィードバックを受け止められる安心する環境が低学年のときに醸成されていれば、高学年のときには発揮しやすいのかなと感じています。

大事なのが社会や周りの大人のイメージだと思います。私たちのこどもの頃は良い学校に入ればなんとかなるだろうとか、良い会社に入ればなんとかなっていただけるだろうという感覚があると思うのですが、それは高度成長期の頃の話であって、今は社会が変わっているのでその感覚ではやっていけない。そこで大人側が思考停止してしまうことが一番良くない。あそこの学校に入っておけば大丈夫だとか、あの会社に入っておけば大丈夫だろうと。そこでもう思考停止しています。それを大人側としては、気を付けなければならないと思っています。

私も亡くなる前に何回かお話したことがあるのですが、教育学者の大田堯先生が「人は人を生かすことはできない。人は自らを生かすことだけだ」と言っていました。まさに、自らが生きるために何をするかという部分だと思っています。

資料の最後のページがすごく大事で「自分が何者か」と言われる部分だと思います。3番の問いはある意味人が生きていく上でのミッションみたいなものであり、4番の問いは「社会で自分が何を貢献できるか」という部分だと思います。こういう部分を意識していけば、かなり良い教育環境ができてくるのではないかと思います。学力テストで偏差値偏重をずっとやっていくとこれは崩れてしまいます。内発的自主性を醸成するには、テストの点数だけではなく、先ほど教育長が言われたみたいに、総合学習で力を発揮します。それは点数ではない。そういう部分ではないところで自分が自分の友達に貢献できる部分があるからこそ、いきいきとすることが出てくると思います。そういう環境をどうやって我々が提供できるかが、かなりできている部分もあり、まだまだの部分もあると感じました。以上です。

○林部長

ありがとうございます。

林委員お願いいたします。

○林委員

私も野澤委員と似たところもあるのですが、「ムトスの学び」とは何か自分なりにいろいろ考えました。親の立場になった自分自身の願いや問いはなんだろうと改めて考えると難しい。こどもたちも、自分から勉強に関することや勉強よりもっと広い範囲で「願いや問いを持ちましょう」というと難しい。あるいは、自由進度の「自由」とは何か。一斉授業を完全に受けてきた人間としては「これは自由にやっていいですよ」「自由に進んでください」と言われたときに、「どうしたら良いのだろう」と非常に難しく考えてしまうと思います。

先ほど野澤委員や北澤職務代理もおっしゃっていましたが、そんなに難しいことではなくて、個々の授業の中でそれぞれの思いが出せる。安心して、ちょっとした呟きや疑問を出せる。それは家庭や社会でも「なんでだろう」「どうしてこうなっているの」ということを、安心して出せる環境がまず一番大事だと思います。願いや問いを持つ大前提として、社会や学校教育の中で、先生やこどもたちがしなくてはいけないという義務に追われ過ぎていない環境が大事だと思います。

授業の中だけではなく、総合の時間やスリンプルプログラムを飯田の教育でも取り入れられていると思いますが、正解ということではなく、いろいろなアプローチで相手の心ももちろんそうですが、第一に自分自身の心に向き合う時間が学校の中でも大切になってくると思います。スリンプルプログラムで自分を表現する時間を設けている学校もたくさんありますので、いろんな教科でも取り入れられるかもしれないと思いました。自分に向き合うことは、自分の中で完結するだけではなく、様々な人との出会いで、自分の興味があることに気付ける。一生涯で何が大事かということ、自分の好きに気付いて向き合えること。大人になっても、社会教育・公民館活動でも、自分がこんなことが大好きで、それが続けられていると幸せだなと気付けることがすごく良いことだと思っているので、この「ムトス」が、そこに気付く最初のきっかけの教育であると良いと思いました。これから小中一貫の学園構想もあり、そこで設けられる特色ある授業の中でも、地域に根差して、地域の方ともたくさん出会って、自分の興味があって好きというところに出会える時間。

少し話は変わりますが、飯田に住んで気が付いたのは、地域の方と学校教育との距離感がすごく近い。PTA以外のお子さんが大きくなられている世代の方も、公民館活動やボランティアで手を挙げて学校教育に関わってくださる方がとても多くてすごくびっくりしました。小学校で読み聞かせをやってもらいたいとなれば、すぐ地域の方やサークルの方が読み聞かせをやっていた。こどもから習字を地域の方から教えてもらっていると聞きました。時代もあると思いますが、自分自身の生まれ育ったところでは、地域の方に何か教わることがあまりなかったので、

飯田の良さは地域とのつながりということもありますので、その良さが「ムトスの学び」の自分の間を持つときにも役に立つと思いました。

まず大前提として安心感がある学校のあり方と、地域の方との出会いが「ムトス」で大事だと思っています。以上です。

○林部長

ありがとうございます。

三浦委員お願いいたします。

○三浦委員

「ムトスの学び」「ムトス」という言葉を恥ずかしながら市の委員をさせていただくまでは知らない言葉でした。けれども、家族は知っていました。この「ムトス」、「せんとす」という、まさに今言われている主体的・対話的で深い学びに該当する言葉が造語として飯田市にあることは、素敵なことであると同時に、飯田市民がこういうことを一つの言葉として受け止めて、飯田市の言葉として、誇らしく置くことができる。本当に素敵なものが飯田にはあると感じます。

「ムトスの学び」とはどういうものなのかと考えたときに、何かをしようとするときに、「なんでだろう」「分かった」「自分でやりたい」「できた」。その「なんでだろう」と思えるきっかけが「ムトスの学び」のスタートであると思います。その人がこどもであり、大人であり、主役だと感じます。また、何かしようとするときには、学校の教育現場における様々な人と人との関係と信頼関係も必要となります。そう考えると「ムトスの学び」の言葉の中には、主体的な学び、動きの中に、人と人との関係性や信頼性もあって初めて成り立つと感じます。

しかしながら、「ムトスの学び」という言葉が偶像化されてしまうと、具体的なものが出てこないと思います。オックスフォード大学の教授をされている荻谷剛彦先生の著書を読ませていただくと、「演繹（えんえき）型の思考」と「機能型の思考」という言葉が出てきます。「ムトスの学び」という言葉を飾りとして置いてしまうと、それが良いものとして、その後の具体的なものが出てこない。「機能的な思考」にすることで、やったこととその効果をきちんと積み重ねていかなければいけないとよく言われています。小中連携・一貫教育の連絡協議会で、学識経験者として任用されている井出先生は、「よくやっていたらしゃる」とよく言ってくださり、「やっていることをきちんと積み上げていくことが必要だ」と会議のときに講評として言ってくださっていると思います。今までやってきたキャリアフォーラムや小中連携・一貫教育での各中学校区の発表でも、「ムトスの学び」ではないだろうかと思うことをやっていて、効果が出ているが、「ムトスの学び」をこどもたちがやったことで、そういうこどもたちが育ったんだというきちんと評価までしたものを積み上げていく。飯田市の公民館が外から評価されているのは、いろいろな積み重ね

を外から可視化できた評価だと思います。飯田にしかない「ムトス」という言葉のついた学びが見える形になって外から評価される。それには、今やっているものを、周りの人に見える形できちんと評価していくことがすごく大切だと思います。

本日はこどもたちの学校教育現場に焦点をおいていますが、この「ムトスの学び」は飯田市民の中にあると考えれば、例えば人形劇フェスタで大人たちが自分たちで「せんとす」いろいろしようとする姿をこどもたちが見ることで、こどもたちの学びにもなります。学校現場においても、先生が主体となって、先生が何かしようとするところをこどもたちが見る。一人一人自ら学ぶ、ルールが敷かれたものではなく、ゴールを決めるものではなく、こどもたちに学ばせることは、先生たちにとってすごく大変なことであると思います。先ほども「公開授業は、やりたい先生に手を挙げてもらってやるようにした」というお話もありましたが、「ムトスの学び」を先生たちが実践することで、誰もがそういうところを「ムトスの学び」として捉えて評価をし、可視化して市民の人と共有していくところから「ムトスの学び」のスタートになると感じます。

○林部長

ありがとうございました。

教育長お願いいたします。

○熊谷教育長

「自分の願いや問いを考え、自由にやることは難しい」という話が林委員から出されましたが、本当にそのとおりだと思っています。東京大学大学院の教授に大学院生でも自分の研究テーマをなかなか決められない学生がいると聞きました。知識をすごく持っている学生でも、自分が何を研究したいのか考えることは難しいという話を聞いて、私もこの願いや問いを持つことは、簡単にできることではなく、難しいことだと思います。そのための体験や出会いがすごく大事だと思います。そういう場は「この学習問題をやりますよ」という授業の中ではなかなか生まれてこないのかなと。もちろんそれをやっていく中で生まれることはあるとは思いますが。資料の中でも、「願いや問いを持つ」というところを一番大きくしたのは、簡単そうでいて一番難しいし、「自分がやってみたい」「これなぜ？」と本当に思ったのならば、その子にとっては追求意欲がものすごく高まっている状況なので、先生の支援が必要な場面はあると思いますが、自らの学ぶというところではすごく大事だと思います。それを保障する周りの安心感もすごく大事だと思います。昔で言うと、教科書を読んで「この登場人物はなんで赤い服着ているの」と疑問を持っても、「それはこういう設定だから置いておいてね」というような授業を自分もやっていましたが、そういう疑問も良しとした安心感、自分が疑問に思ったことを追求できる雰囲気づくり、場づくり、あるいは環境づくり、「これが欲しい」「これやってみたい」ということもすごく大事だと思ってお

聞きました。

○林部長

野澤委員お願いいたします。

○野澤委員

どうしても日本の社会は同調圧力が非常に強い。自分は嫌だけれども、みんながそう言っているとそう言わなくてはいけないという同調圧力がなくなるにはどうしたら良いのかがすごく課題としてあると思います。これからは、いわゆるかぶき者大歓迎の社会になってほしいと私は願っています。

○林部長

ありがとうございます。

市長お願いいたします。

○佐藤市長

今までのやりとりで、かなり自分の中で腹落ちしているところがあります。今までの教育で自分が嫌だと感じていたところは、安心できないところだった気がします。林委員から「義務に追われない環境」というお言葉がありましたが、成績や競争に追われる状況がずっと続くことがきつかったと思いました。これも林委員のご発言にありましたが、自分にとって何が幸せなのか気付ける学び。その気付きを与えてくれる学び。「飯田で学ぶと何が自分の人生で幸せなのか気付けるんです」と言われたら、ぜひ飯田で学ばせたいと思うと思いました。

私も少なくとも大学に入るまで「自分は何をすることが幸せなのか」「何のために勉強しているのか」正直分かっていなかったと思います。分からないからとりあえず良い成績を取ることを目標にして頑張っていました。その先にある「自分の人生どうしたらいいのだろうか」を大学を卒業するときでも分かっていなかったのかもしれないと思います。もちろん小中高 15 歳、18 歳までの間に、自分の人生が全て分かるとは思えないのですが、「自分が何をやっているときに幸せなのか、どういうことをやってみたいのか、ここにいれば気が付ける」と言われたら、すぐ行ってみよう学校になる気がします。「『ムトスの学び』とは何か」と聞かれたときに、「どんなふうに生きていきたいか。何をしているときに幸せかを気付かせてもらえる」と言われたら、すぐ行かせたい学校だという気がしました。そういう意味で、私は今日のテーマかなり腹落ちしました。

○林部長

教育長お願いいたします。

○熊谷教育長

今、市長がおっしゃったような「何をやっているときに幸せか」ということはすごく難しいこ

とですが、とても大事なことで、それは財産になり、人生で生きる目的・目標を生み出すことにつながると思います。

総合的な学習の時間が始まったときに、こどもたちと何をやりたいか考え、豆腐を作るようになりました。豆腐を作るための畑を借りに行きましたが、意外に広くて困りました。その畑の地主さんに使っていないトラクターがあるから使っても良いと言われ、私がトラクターを運転すると、その周りをずっと離れない男の子が何人かいました。保育園と交流した時に、カメラで記録を撮りたいという子がいました。そういう子はすごくそのとき前向きなんですよ。その彼に卒業先を聞いたら、車関係の仕事をしているらしい。そういう機会に携わったことが今の仕事につながっていると聞き、そういうことも学びの中に見いだしていくチャンスがあるのかと思いました。

○林部長

環境や地域との関わりなどかなり幅広くお話をいただいております。課題も含め話を広げていただき、ご発言いただければと思います。お願いいたします。

○北澤教育長職務代理者

今週末 14 日に鈴岡城址公園で高校生と大学生が協働して、放置竹林の竹を使って、小学生とその保護者を対象に竹の活用を考えるワークショップを計画しています。先週その高校生と大学生にお話を聞く機会がありました。飯田に 4 年制大学はありませんので、大学生は岡山や東京からリモートで参加し、地元の高校生はその場所に来てくれて一緒に話をしました。具体的には風越高校の普通科の子たちなのですが、全然違うところに住んでいる大学生と高校生の出会いのきっかけは何かと聞くと、特定非営利活動法人いなだに竹 L i n k s の竹林整備にそれぞれが参加したことが出会いのきっかけとなったそうです。大学生たちは全国から来ており、NPO 法人の国際ボランティア学生協会に全国 80 大学で約 2,600 人が加盟しているとのこと。伊那谷の竹の整備には、10 大学 50 人くらいが来てくれて、リモートで話した方は東京から既に 6 回参加しているとおっしゃっていました。出会った高校生たちによると、「自分の前に 4 年制大学の学生がいないのだけれど、こういう機会に身近に接することで、進路選択の参考になるし、同じ活動をすることで、働き方、企画の立て方、会の進め方などすごく学べることが多い」と言っていました。今回どうして企画したのか聞くと、偶然その中の一人は資料に出てきた龍江小学校出身の子で、「小学生のときに地元の方たちが学校へ竹を持って来て、竹の細工や、給食に採れたタケノコが毎年必ず出た」と言うんです。後から調べたら、龍江の「はちくの会」の皆さんがやってくれていたことだと思うのですが、そういう学びに接してきた子でした。一人は高森中で、高森も数年前、放置竹林の竹を使ってギネスブックに載るような流しそうめんをやりましたが、それを

体験した子でした。そういうことがきっかけで、特定非営利活動法人いなだに竹L i n k sに参加したら、大学生との出会いに広がり、話の中で今度の鈴岡城址公園の企画に応じたそうです。小中学校で学んだことを大学生とコラボして、小学生に伝えるイベントを開くところまでつながっていく。出会いのきっかけは、周りにコーディネートする人間がいないと進まないことも改めて思っています。でも、小学校からの学びが高校生、大学生にまでつながっていくと思いました。

同じようなことは、1カ月ほど前に飯田高校と風越高校の校長先生とお話する機会があり、「小中学校だけではなく、高校でも授業の状況は、脱チョーク、脱講義型はもう当たり前になってきている。タブレット端末を活用して主体性とか個別化を大事にしながら、ペアワークや協働学習をすることがかなり多くなってきている。特に普通科の総合的な探究の時間や専門学科の課題研究が導入されてからは、個人やグループでテーマを決めて、課題解決のために、地域の関係機関と連携して学んでいくことがすごく多くなった。」と言っていました。その成果として、校長先生たちが実感していることは、「高校生の学習姿勢がすごく主体的で意欲的になってきている。進路選択の際にそれを生かすなど意識がすごく変わってきた。」「仲間と協働して何かやる、社会の人との関わり方も変わってきている。」「地元や地域への関心がすごく高まってきた。」「高校生が大学入試にその学びの結果を活用できる状況がすごく進んでいる。」という話をされていました。

野澤委員が冒頭で話されたことともつながるのですが、大学入試の形が多様化しており、「ムトスの学び」でやったような成果を評価する大学がすごく増えてきており、国公立大学でもAO入試の選抜者の3割ぐらひはそういう活動で採用しています。日本全体の枠組みとしても、こどもたちに求める力が前のように知識だけではなく、知恵までつながるような行動力のある学生を求めていると思いました。

そんなふうに世の中自体が変わっている中で、この間、県の教育長にも要望を申し上げたことなのですが、そうやってだんだんいろんな学びが変わっているのに、高校入試だけが変わらないということがあります。市内のこどもたちの様子を見ていても、学校でかなり地域とも関わる良い学習をしながら、中学3年生では、知識や紙の上での学力で選抜される高校入試をどうしてもターゲットにせざるを得ない状況があります。県の教育長にもお聞きしたら、「そのところは真剣に考えている。」「県でも、なんとかそれに応えられる形に変えていきたい」とお答えいただいて、とても心強かったのですが、制度上のことも変えていかないといけないと感じました。

○林部長

佐藤市長お願いいたします。

○佐藤市長

今の高校入試・大学入試の話はすごくリアルで、大事なところだと思います。

私には中学校2年生と高校3年生のこどもがいます。大学入試・高校入試を考えたときに、先ほどの「自分が何をやっているときに幸せか」ということと入試が実は乖離しているので、これもやらざるを得ないというのは、今のところ避けられない環境です。それをなくすのは難しいかもしれませんが、緩和できるとすれば、高校まで含めて信州で学ぶことがすごく魅力的になるということだと思います。

最近、知事はどこに行っても「教育」の話をされますが、知事のイメージもそういうことなのではないかと思います。信州で学ぶとこういう人が育つ、そういう仕組みにするにはどうすればいいのか。高校入試も変えないといけないだろうし、県の教育委員会の守備範囲ではないが、阿部知事も小中学校の学びについてもぜひ変わってほしいという願いを持っているのではないかの言葉の端々から伺えます。北澤委員のおっしゃったような意味で、小中学校の学びも変わったときに、高校入試という一つのゲートも変わっていくとすると、「長野県で18歳まで学ぶとこんなこどもになる」「そのときにはちゃんとその先も困らないですよ」という環境が全体としてできたとすると、大きく変わる気はします。そう変わりたいと思います。

○林部長

教育長お願いいたします。

○熊谷教育長

評価の部分は、三浦委員がおっしゃったことにも関わりますが、すごく難しくてそこが変わっていかないとなかなか勢いがつかないというところもあると思います。学校教育の中で先生方もそういうことは少しずつ意識していて、上村小学校では自由進度学習を行っています。大きな学校でも校長先生が今までこどもたちに「こうしたらいいんじゃないの」というアドバイスだったのを、「あなたはどうしたいの」という問い返しをするような変化も学校現場では現れていると思います。校内の中間教室を充実させようとしている中でも、こどもたちが勉強をやりたいのなら勉強で良いのだけれど、「本当に今何をやりたいのか。あなたにとって得意なものは何なのか。」を見いだしています。そういうことを大事にしつつあると思う一方で、教室の人数が多い学校で自由進度学習をやってみたところ、こどもたちがワイワイガヤガヤするので、それを見た保護者や地域の皆さんが「こんな授業をやって良いのか」という問題意識を投げかけられました。「ムトスの学び」が本当になったような授業は意外とまだ先生たちも経験が少なく、周りの地域や保護者の皆さんも、みんな静かにお行儀よく座って、聞いて、ノートをしっかり取る授業は素晴らしい授業だという実感はあるのですが、好き勝手にワーワーやっている授業で良いのかという抵抗感がまだまだあると思います。先生方も思い切ったことはしばらくという空気です。さっきの安心感ではないですが、先生たちにとってもそういう授業をやっても良いという安心感がまだまだ

十分ではないのかもしれないと感じました。そういう課題も、それは非常に子どもたちの学びの姿が変わっていくことが、三浦委員の「可視化された評価」にもつながっていくのではないかと思います。一番大事なことは、全体としてどうかということよりは、一人一人が本当に自分の願いや問いに向かって追求することが進んでいるかを見なくてはいけないと思います。それを全体としてボヤッと見ると、「なんだ、この授業は」みたいなことになり得るかと思うのですが、これから課題として一つあるとは思っています。

○林部長

三浦委員お願いいたします。

○三浦委員

今のお話を聞きしていて、先ほど演繹型と機能型の話をさせていただきましたが、教育がアクティブラーニングだといって主体的・対話的で深い学びをする教育をなさいたい流れになってきたときに、曖昧な与えられたものに対して、現場の先生方はよく研究されて、具体的に教育現場に落とす苦労をされているのを学校の授業を見て正直思いました。主体的な「ムトスの学び」ともし定義するのであれば、「ムトスの学び」というところで、先生たちが積み上げられたものが授業の中にもあると思っています。ワイワイしている授業で学習効果を上げている授業もありましたし、通常の授業体系の中できちんとした問いを投げかけて、子どもたちにきちんと考えさせる。それも「せんとす」というか、きちんと自分の頭の中で思考する時間や問いを与えて、「そうか、分かった」という授業の展開を一生懸命しようとする先生の授業に変わってきました。ちょうど私はそういった変化を見るだけ委員の任期を与えていただいたので、そういうのを見てきて、そういったものを積み重ねてこられた飯田市の学校教育現場が確かにあると私は思っています。先生方のご努力もあるし、ただ放っておけば良いというのが「ムトスの学び」、主体的なものではなくて、そこには子どもに興味を持たせる工夫や、先ほど林委員や市長が言われていたような何を言っても大丈夫だという安心できる環境に体制を整えてきている現在の飯田市の教育現場・学校現場が確かにあると思います。

○林部長

ありがとうございます。

林委員お願いいたします。

○林委員

今、授業に関しての保護者の理解というところを言っていて、先日学校で保護者にスリンプルプログラムの体験をさせてもらえることがあったのですが、今までと教育の考え方が違うところが出てきたことが、意外と保護者にはなかなか伝わりにくい。大学・高校の受験システム

も変化してきている部分もあるのですが、大学受験も今はずいぶん国公立大学でも推薦があるというのも、当事者の学年にならないとなかなか気付かない。課題というところで言うと、地域や保護者の方にも「飯田市の目指しているところはこういうところだよ」というのがもっと分かりやすい形で、今まで積み重ねがあって、ちゃんと先生たちは工夫されて現場で一生懸命やったださっているところを、伝えていくことも大切だとすごく感じましたし、今お子さんが多様化されていて、オンラインやフリースクールで学びたいお子さんもいらっしゃいます。そういう個別の事情に合わせた学びがもっともっと進んでいくためには、地域の企業、住民の方、あるいは保護者みんなが手を取り合っていく。もっともっと教育もそういうところにも助けを求めながら進めていく。実は大人になっても「ムトス」は本当に大事で、保護者自身も体験していかななくてはいけない。自分に置き換えてですけれども、学生のときだけが学びではなく、本当は一生の学びだと思いますが、大人になると忙しかったりなんだかんだで置いていかれてしまう。例えば学校教育の学びを通じて、自分もこれやってみたいと思わせてもらえる。自分自身も全然知らなかった公民館活動に関われるようになる等こどもや学校教育を通じてどんどん広がっていく。こどもがいなくても、働く場や地域を通じて、飯田市全体で手を取り合っていけると良いと感じました。以上です。

○林部長

ありがとうございました。

三浦委員お願いいたします。

○三浦委員

今、私も本当にそうだなと思ってお聞きしていました。学校で何が行われているのか、しっかり地域や家庭が分かることが大事だと思います。「家庭では何をしよう、地域では何をしよう、企業ではこんなことができる。」というように、もともと公民館活動の土壌がある当地域において、応援団もあります。そこにもやはり「ムトス」の考え方というか、「応援しよう」というものができると、本当に良い循環になると考えました。小中連携・一貫教育のときに、上久堅のまちづくり委員の方が来ていて、「おらほうのこどもたちはよくやってくれておるんな」という言葉がとても印象に残っています。「おらほうのこどもたちが」という目で見たださっている。そういった地域性がある。自分たちも応援団であり、自慢できるこどもなんだという良い関係性が生まれてくるのに、学校が可視化しやすい、見やすい、何やってるのか、どんなこどもたちなのか、自分のこどもを地域のこどもとして自慢できる流れが良いと思います。

○林部長

ありがとうございます。

野澤委員お願いいたします。

○野澤委員

高校を卒業する頃、自分の人生は一切考えていませんでした。家庭が貧しかったので、高校卒業したら就職すると決めていました。全部自分で段取りを決めて、父親に「こういうところへ行く」と言ったら、父親が猛反対して「大学に行け」という話をされました。前段があって「お前は本当は何をしたいんだ」ということをほぼ一週間、父親が職場から帰ってくると二人でずっと話をしていました。そのときに見た書籍の中に、好きなことと、自分の得意なことと、これからの社会で貢献できそうなこと、その3つが重なっているところが、もしかしたらあなたの一生みたいなのがありました。三日三晩考え、自分は好きなことはものを作ること。プラモデルとか大好きだった。物理と数学が得意だったので、その辺のことはできると思いました。これからの社会を考えたとき、通信系や情報系の仕事で貢献できると思い、大学に行こうとなり、そこから大学に挑戦しました。今の小中高を見ている、その辺りを意識させるような指導をしているのか。本当に好きなことは何なのか、この子の本当に得意なことは何なのかを意識されるような持って行き方があって然るべき。我々の頃は社会の高度成長の最後の頃なので、とにかく均質な労働力を排出すれば良いみたいな教育のあり方だった気がします。なので、偏差値偏重で、とにかく平均的な人をたくさん出せば良いというところがありました。自分も何度もそういう上に乗っていたことを何も意識もしていなかったのですけれど、父親との対話で、このように考えたら良いのかなというのがあり、今があると思っています。自我が芽生えてきた頃からある程度そういうことを考えさせるチャンスが必要だと感じました。

○林部長

ありがとうございます。

会議の終了時間も迫ってまいりました。

今まで非常に貴重なご指摘をいただいていたと思います。それでは、これから教育長に全体的なコメントをいただき、その後、市長から本日の意見交換の全体を踏まえて、まとめのあいさつをいただきたいと思います。

それでは教育長からご発言お願いいたします。

○熊谷教育長

ありがとうございました。今日は大変貴重なご意見をたくさんいただきました。私は「ムトスの学び」をささやかな取組とは思ってはいたのですが、授業改善の根本的な本質にも関わることは思っていました。今日いろいろご意見をお聞きして、もっと自分の生き方、自分の好き・得意なものは何かという自己理解、自己肯定感にもつながると改めて感じました。そうしたものが

飯田の特徴的な学びとして、胸を張ってもっと理解していただけるようなことを進めていきたいと思いました。生き生きとしたこどもたちの学びの姿を見ていただければ、保護者、地域、そして社会・企業につながっていくのではないかという期待感を持てる時間になりました。今日はありがとうございました。

○林部長

続きまして、市長、お願いいたします。

○佐藤市長

今日はすごく腹落ちをした時間でした。ありがとうございました。資料2ページの「ムトスの学び」の図を初めて見ましたが、どこで使われているものですか。

○熊谷教育長

校長会や先生方には示しているものです。

○佐藤市長

すごく分かりやすい図なのですが、この学びの先に何があるのかをここに書き加えていただくと、「私の問いを持つ」「私の願いを持つ」というこのサイクルを「やってみる」「体験する」「出会う」「自分の考えを持つ・伝える」「友の考えを知る」のサイクルで回していったその先に、私にとって何が幸せかに気が付く。「ムトスの学び」を経たこどもや大人も含めてかもしれませんが、自分の人生、自分の生き方として何が私にとって幸せかに気が付くということになる。授業のやり方の話ではなくて、要するに「ムトスの学び」の先に、こどもの育ちとしてどういう姿があるのかが図示されると、「よっしゃ、やってみるか」という感じになると思います。親たちもそういうことならぜひ一緒にやりたいとなるのではないかなと思います。もう少し図を完成させる意味でいうと、「やってみる」「体験する」「出会う」機会を地域も含めて周りのみんなでつくる。先生や学校だけではなく、地域も含めて周りの大人みんなでそういう機会を与えるように努めるのが「ムトスの学び」で、その先に「あなたは何を幸せに感じるか」が見えてくるかもしれない。そういう感じで『ムトスの学び』は何かを伝えられると、関わる人たちの気持ちが変わってくるような気がしました。

今日は皆さんとの意見交換で、私はとても腹落ちをしましたので、感謝を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

○林部長

ありがとうございました。

それでは、意見交換は以上とさせていただきます。

4 その他

○林部長

そのほか、委員の皆様でこの場で共有しておくことがございましたらお願いいたします。

(発言する者なし)

5 閉 会

○林部長

以上をもちまして、第1回の総合教育会議を閉じさせていただきます。大変ありがとうございました。

閉 会

午前11時30分